

ロス・ゲアホローテス
七面鳥亭

たまたま三三号室になって彼は気分がよかった。三三号室を三〇三号室と呼ぶような気取りはまだそのホテルにはなかった。それに、ラモン・ロペス・ペラルデが死んだのも三十三歳であり、そうした偶然の巡り合わせは彼にとって必要なものだった。どんなに迷信じみたものであれ、詩人と自分を結びつける情報は自信をくれた。ラモンについては通り一遍の知識しか持たず、それはつまり何も知らないのも同然だった。彼については誰もがありとあらゆることを知っているんだから。

うってかわって、宿泊客カードに記入した自分の名前のほうは突如として不可思議なものに見えた。まるで、ふたたび演じつつある自分自身という役どころを確認しなくては、とでもいうように、「フリオ・バルディエソ」というその名を黙ったまま目で追った。

書類入れを床に置くこともしないうちに（ベルボーイは彫像よろしく従順にチップを待ち構えていた）電話が

鳴った。

「んでどうなんだ？　もう着いたのか？」聞き慣れない声があった。

「どなたですか？」

「仲間のことを忘れたってのか？　ヴァイキングだよ」

「誰ですって？」

「ファン・ルイスだ。オランダ・バルボサのワークショップでみんなにヴァイキングって呼ばれてたろ。もう長年広告業界にいる。メキシコ北部とアメリカ南西部における固形コンソメの売り上げに最も貢献したのがこのオレだ」

《コカインか》フリオ・バルディビエソは内心そう考えた。話は続いた。

「帰ってきてくれて渡りに舟だよ。至急お前に会わなきゃならねえ。二時間後でどうだ？」
「七面鳥亭」ロスアラホーナスがそのホテルの裏手にあるからよ」

「オランダ・バルボサのクラスにいた奴か？」

「みいんな作家になりたがってたが、誰一人ならなかった」上々な結果だとしても言うように、回線の向こうでヴァイキングが笑った。「お前のこたあ覚えてるよ。チリ女のオルガ・ロハスと付き合ってたよな」

「付き合ってたよな」

「よせよ、慎みなんて今日び流行らないぜ！　くそが、電波のないところに入っちゃまう」——雑音が回線を遮った——「この憂き世で携帯を使うなんざ苦勞なことだよな……でどうだ？　二時間後でいいか？」

通話は途切れた。フリオとしては、プール脇に見かけたカフェで一人夕食をとりたいところだったのだが、もう異論は挟めなかった。祖国へ帰ってきたことを大袈裟にせぬよう、母親の家に帰るのもよそうと思っていたのに、すでに厄介事に巻き込まれている気がした。ヴァイキングとは誰のことだっただろう？　二十四年間のヨ-

ロツパ滞在ではあだ名で呼ぶ友達などできなかった（ジャン・ピエール・レリスのことはマン・イン・ブラックと呼んでいたが、それも陰でこっそり言っていた）。ロシア女に見えるチリ女、オルガ・ロハスに思いを馳せた。悲劇的なエピソードを暗示していた彼女の目。残念ながら、フリオはその中に含まれてはいなかった。オルガのオーツ麦の石鹸のような肌、小雪にひりひりと焼けたような眼差し、紅茶の蒸気と熱のこもったシャツとのあいだで震えだしそうな身体。

眼を閉じると、オルガの後ろに座っていた文学ワークショップの光景が思い出された。小さな椅子の背もたれからは背中下部が見えていた、脊椎骨三つ分はだけたTシャツ、微細な金のうぶ毛に覆われた青白い肌の縞模様、ほくろが織り成す束の星座と、パンツの黒い線。オルガ・ロハスが履いていたのは決まって黒のパンツ、少なくともそのワークショップではそうだった。ある日の午後、トレンチコートを着た禿げ男が、メキシコ国立自治大学の学長塔トレデレクトリアの下でオルガを待っていた。無愛想な男で、そいつとすでにすったもんだがあったことはオルガの眼を見ればわかった。その男はオルガの金色の髪を、爪の汚れた太い指で愛撫していた。まるでシベリア流刑囚。ドストエフスキーのまがいものみたいなことが実人生に起きていたのだ！ オルガはそいつと一緒にやってしまった。たぶんヴァイキングはフリオと、あの気持ち悪いコートコートの男とを混同してたんだろう。

ヨーロツパでフリオが見ていた夢の舞台は、きまってカナル・メヒコメキシコだった。浮かんでくるのはインスルヘンテス通り、ニーニョ・ベルデベルデ通り、オブレロ・ムンディアル通り、夜空を模倣したサン・ルイスのアラメダ映画館。彼の無意識は輸出仕様になっていなかったのだ。また別の詩人が（ここ最近では、ロペス・ベラルデ以外の詩人はフリオにとって「また別の」詩人になってしまっていた）《輪郭無き夢の祖国》と呼んでいたその

世界で、ヴァイキングの姿を目にした覚えはなかった。あのコートの男が出てきたことはあったし、オルガの姿はしょっちゅう目にしてきた、見事なまでに悲しげなオルガ、彼女にびったりなステップの風に乱された髪、凍りつく空気に鋭くそびえる鼻、怒りあるいは恍惚の涙を湛えた眼。

流れるシャワーの下で、なんとかヴァイキングとやたらに人相を与えようとしてみた。名前はファン・ルイスと名乗っていた（例の《イタの首席司祭》〔スベインの詩人・聖職者であるファン・ルイス（二八三―一三五）の異名〕と同じ名前だな、とフリオが考えたのは、その用語がいまだ記憶に残っているのを確認するためだった）。

名前をよすがにするのは、あたかも劇団の更衣室に入っている、衣装から登場人物を復元してみるようなものだった。緑の帽子を被ってそこに存在していたのは、一体誰なのか？ 妖精か、狩人か、それとも不幸な王子さま？

シャワーの水圧は申し分なかった。まっすぐ母親の家に向かわなかった理由の一つはこれ、配管との終わりのなき聖戦が待っていたからだ。水とともに降りそそぐ塩素臭を吸い込んだ時、突然、オリンピックプールにいる自分の姿が目に見えなくなった。飛び込み台の階段にいて、馬鹿ばかしいことだが、手には本を持っていた（もうすでにパヴェーゼ？ いまだにコルタサル？）。ワークシヨップの仲間が予選会に出ているのだ。台を登り、ゆっくりと飛び込み板を進んでいくヴァイキングの姿が見えた。飛び込みの命運は、板上での集中にかかっていた。身を投げることは精神の仕事なのだった。なぜ彼がヴァイキングと呼ばれているのかフリオが知ったのはその午後だった。水がぬるい、としょっちゅう文句を言っていたからだった。

永遠に等しい数秒のあいだ、ファン・ルイスは飛び込み板の際に静止し、鮮やかな旋回を見せつけながら飛び込んだものの、予選通過には届かなかった。水面接触時に水が飛び散り過ぎたのだ。弓なりに曲がってしまった背中も、フリオには気づかない程度だったけれど、コーチにとってはそうではなかった。神経症的な眼差しと、スローカメラからなるスポーツ。

飛び込み台を離れてもヴァイキングは、評価に迷う回転を加えながら落下していった時と同じ速度で、人生を生きているみたいだった。

ホテルで体を乾かしているあいだに、フリオはジャン・ピエール・レリスとパリで最後に会った時のことを思い出した。「マン・イン・ブラック」の体臭を緩和すべく、フリオはベルノのグラスを鼻のすぐそばに置いた。宗教の勧誘をしてくる手合いとは対照的に、同僚レリスが目指していたのは説得ではなく罵倒だった。カフェ・クリュニーのまどろみの中、レリスはいつもの挑戦的な調子を出してきた。フリオ自身よりも妻であるパオラのほうがメキシコの現状についてずっと詳しい上に、レリスですら知らない作家たちを訳しさえしているという事実を、信じたいと考えていたのだ。レリスはメキシコの知識人たちを、助成金つきの官僚ともで、聖職者と同様陰謀に加担しているとして罵った。《帰国後のきみがぬくぬくと、あのろくでなしどもの仲間入りをせざるにいられるかどうか拝見といこう》覚束ないスペイン風の言い回しを用いながらレリスはそう言った、《もっともきみはむしろ形而上的クリオージョ、姿をくらましたマリアッチといった塩梅だがな》。

レリスと会えたのは好都合だった。指導教員になるのはいいが読む気は起きなかった四本の博士論文を、代わり引き継いでくれたのだ。

香りというものは不思議にも、いまここを離れて旅をすることがあった。妻や娘たちが持つような、現代の流行り病を感知する獲物の鼻はフリオには欠けていたけれど、かつて感じた香りや、プールの塩素臭、ジャン・ピエールが黒々と放つ臭いと混ざり合った、アニス酒のもたらす甘い薫香は、容易く彼の元へ届くのだった。残念ながらけっして自分の意志によるものではなかった。ふと吹く風が、彼をニエベスやパオラの元へと運び、分泌物と香水の混じった心地よい香りを感ぜさせることは多々あったものの、その感覚を思い通りに呼び出すことはできなかった。

現在に留まるために、フリオはローションを多めにつけた。